

現代青年の「未知な経験に対する態度」の検討

竹本さり (関西学院大学大学院)

キーワード: 大学生, 未知な経験, 新奇性

目 的

文部科学省は、現代青年を「内向き志向」であると表現しており、新しい環境への苦手意識を抱いている者や主体性が乏しく、新しく行動を起こそうとする学生が少ないことが示唆されている。(小島ら, 2014)。さらに初対面とのコミュニケーションに苦手意識を抱いていることも明らかにされており(飯塚, 2010)、自分からさまざまなことに挑戦している大学生が少ないように考えられる。そのため、本研究において、大学生が「新しくなじみのない経験に積極的に関わろうとする態度」を「未知な経験に対する態度」と定義する。そして、現代青年の「未知な経験に対する態度」の内的構造や特徴について検討する。

方 法

《調査対象者》関西の私立大学生 1・4 年生 275 名 (男性=107 名, 女性=167 名, 平均年齢 20.16 歳)。
《調査内容》未知な経験への態度尺度: 大学生を対象にした予備調査と、小塩(2002)と Cloningr(1987)を参考に項目を作成した。心理学の教員 1 名と教育学専攻の大学生 4 人により、作成された項目をもとに妥当性を検討し、最終的に 23 項目を採用した。回答は「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 件法であった。

結 果

未知な経験への態度尺度の検討

未知な経験への態度尺度について因子分析を行ったところ、3 因子が最も適当と判断した。主因子法、プロマックス回転により 3 因子を抽出し、第 1 因子を『対人関係の開拓』と命名した。第 2 因子を『新しい課題への挑戦』と命名した。第 3 因子を『環境変化への適応』と命名した(Table 1)。性差を検討したところ、『新しい課題への挑戦』($p < .01$)と『環境変化への適応』($p < .001$)において、それぞれ女性より男性の方が有意に得点が高かった。

未知な経験への態度のパターンの検討

現代青年における未知な経験への態度のタイプを検討するために、3 つの下位尺度得点を標準化し、階層別クラスタ分析を行った。その結果、4 つ(積極的活動群, 対人関係拡大志向群, 自己課題挑戦志向群, 消極的内向群)による分類が適切であると考えられた。パターンごとの特徴を検討するために各因子の得点の平均点を 2 要因の分散分析(混合計画)を用いて算出した(Table 2)。

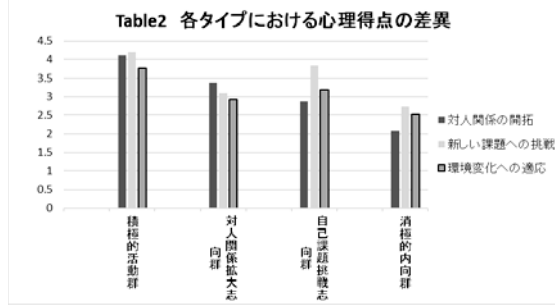
考 察

3 つの下位尺度得点のうち、『新しい課題への挑戦』得点が最も高いことから、対人関係や環境変化における未知な経験よりも物事に対する欲求やポジティブ感情が強いことが考えられた。また、男子学生の方が女子学生よりも未知な経験に対する態度の得点が高いことから、男子の方が積極的な態度を示していると考えられた。4 つのクラスタの特徴から男女では未知な経験に対する態度が異なることが示唆された。

Table 1 未知な経験への態度の因子パターン表(プロマックス回転後)

項目	F1	F2	F3
Fact1 対人関係の開拓 (α=.910)			
T10 初めて顔を合わせる手段の中でも自分から周囲の人と親しくなれる	.890	-.194	.037
T20 初対面の人とも打ち解けることができる	.857	-.118	.058
T04 初めて話す人とも会話を続けられる	.848	-.055	-.050
T14 初対面の人に自分から話しかける	.834	-.084	-.081
T06 知らない人がたくさんいる場でも楽しむことができる	.681	.091	.060
T01 知らない人と出会うことは楽しい	.615	.197	-.015
T07 新しい友人の前でも自分らしくいられる	.501	-.077	.292
K21 新しい環境の中でも自分から積極的に動くことができる	.494	.148	.227
A05 自分から今の状況を変えようと動いている	.416	.331	-.313
Fact2 新しい課題への挑戦 (α=.813)			
A19 新しいことにどんどん挑戦したい	.172	.787	-.106
A18 新しいことに対しては、不安よりも興味・関心の方が強い	-.095	.711	.154
A09 新しいことを始めるのが好きだと感じる	.296	.646	-.153
A03 知らない場所へ一人で出かける	-.317	.623	.137
A17 一人を旅する	-.207	.567	.116
A12 やったことのないことをするのは楽しい	.193	.492	.112
K23 環境の変化に対して、不安よりも期待のほうが多い	.099	.478	.234
T22 文化や言語(方言を含む)の異なる人とも態せず親しくなれる	.241	.318	.137
Fact3 環境変化への適応 (α=.697)			
K11 環境の変化にも臨機応変に対応できる	.209	-.037	.587
K13 今おかれている状況が変化しても混乱しない	-.099	.117	.584
K02 慣れない環境の中でも自分のペースを崩さずいられる	.046	.089	.568
K15 新しい環境にすぐになれる	.370	-.078	.495
K08 環境変化によって生じた困難な状況に対しては、冷静に対応策を考える	-.114	.157	.466
因子間相関	F1	F2	F3
F2		.516	
F3		.565	.487

注1: Tは対人関係の開拓, Aは新しい課題への挑戦, Kは環境変化への適応を表す。
注2: α係数は、.35以上の負荷量を示した項目のみを採用して算出した。
注3: 重複した項目は、.300以上を採用した。



引用文献

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002).
ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理
的特性—精神回復力尺度の作成—カウンセリング
研究(35)1p57-65.